刑余者が包摂される社会を

法文学部　准教授　福井　栄二郎

21世紀になった現在でも、この社会のいたるところに差別があり偏見があります。その当事者たちは、社会の「フルメンバー」とはみなされず、生きづらさを抱えながら暮らしている現実があります。刑余者（過去に犯罪を犯した人）もその例に漏れません。彼らはなかなか地域社会に馴染めず、疎外されていると感じています。福井研究室では、松江刑務所を出所した刑余者に生活史インタビューを試み、社会的排除のメカニズムを考察してきました。

彼らは、さまざまな事情のために家族のもとに帰れず、出所後、縁もゆかりもない松江に暮らしています。インタビューをしてわかったのは、彼らの多くが、過去の犯罪歴を隠して生活しており、そのために職場や近隣の人とも心理的な距離を置きがちになるということです。結果として、人間関係が希薄となり、心配事や困りごとを相談する親しい友人もできません。

彼らが「地域から疎外されている」と言うとき、そのようなより個人的な人間関係が起因していると考えられます。差別や不平等がなくなり、誰もが「フルメンバー」として安心して暮らせる社会にするためには、このような親密圏の構築が不可欠となるでしょう。